



人文学术  
RENWEN XUESHU



# 日本語の依頼文をめぐって

赵彦志◎著

 復旦大學 出版社

# 日本語の依頼文をめぐって

趙彦志 著

復旦大學 出版社

# 序

彦志与我师出同门——同是师从松本泰丈先生学习日语语言学(日本語学),年龄他小我许多,学位他比我晚拿几年,所以说得大言不惭一点应称他为师弟。与彦志初次相识是在电子邮件上,因老师不熟电脑,电子信件的往来全都拜托给彦志,于是我回国之后与老师的联系除电话以外,邮件也大都由彦志中转。后来,老师到上海讲学,我前往拜见时,从老师手中得到彦志的论文,开始对彦志的研究有所知晓。2010年彦志学成回国,任教复旦大学,便有了经常见面的机会。2011年我校承办的第三届汉日对比语言学年会上,彦志积极参会并发表,给我留下很深的印象。他对日语请求句(依頼文)研究的执着和卓有成效,令我非常感动。这次他嘱我为大作写序,虽自知资格不够,但其情也盛,却之不恭,只得从命。

在日本对请求句的研究可以追溯到二战以前。具有代表性的学者可举出松下大三郎和三尾砂等。但在那个时期对此句型的论述大多是以列举用例为主,进一步深入的研究还很少见。20世纪50年代代表性学者有三上章和永野賢两位。特别是三上章的“命令法”与请求句相关很大。1979年以工藤真由美的〈依頼表現の発達〉为起点,请求句的研究发展到了新的阶段。仁田義雄 1991、佐藤里美 1992 等也都是这方面非常著名的研究。还必须一提的是,山田敏弘 2004 对请求句做了非常详尽的考察。

本书是彦志博士论文所研内容的延伸。主要内容及创新点可简单概括如下。全书是围绕请求句的各个语法点展开的。首先对其概念从句法学(統語論)的角度重新定义,并对各个构成要素作了详细的说明。因为配有较多的文学实际用例作为论据,所以较先行研究更加具有说服

力。其次,学术界对于请求句的分类一直是存在争议的。本书从“～テクレル系”,“～テモラウ系”两大分类着手,分别对它们的功能及意义作出阐述。一般认为,“～テモラウ系”中包含“～てもらいたい”句。后者由于还可以归为希望句中去,因此它就同时具有两个类别的语法特征。第三章对此给出了非常清晰的论证。另外,日汉对比研究在请求句这个层面上,相对而言还是不多见的。第六章从语法的角度分析了中日文学对译作品中的例句,着眼于句法上的区别,为今后这类课题的开展提出了有益的启示。中日两种语言虽然属于不同种类的语言体系,但是从句法的角度而言,还是有一些共同点的。在此作者也作了部分列举。最后,书中提到了请求疑问句中的可能形式,对它存在的必要性给出了明确的结论。“～てもらえますか”和“～てくれますか”,为什么前者的尊敬程度高于后者,对这一有争议的问题也给出了他的见解。

以上的内容和创新点对日语的请求句研究和本语法点的日汉对比研究都做出了很大贡献。还不仅如此,因为有详尽的日汉对比的考察,对中国日语学习者学习日语请求句时的学习和教学,都会起到直接帮助作用。这一点使本书除了理论价值以外还具有了相当的应用价值。

本书作为彦志研究请求句的系列之一,重点侧重在句法层面的研究。词法层面的研究将以《現代日本語依頼形の研究 ―形態論を中心に―》为题另行出版(复旦大学出版社,2012年9月)。如果读者将两册书相互参照,想必读起来会更加有趣。

彦志学弟年轻有为,且聪慧勤奋,在日留学期间已有多篇论文发表,今年又一举出版两部专著,并在回国后的短短几年里,取得了教育部人文社科等高级别科研项目的立项,气势实为咄咄逼人。衷心希望他在语言研究的道路上,走得更好更远。期待着彦志学弟取得更好更大更多的成果。

王 忻

2012年8月于杭州

# 序 文

たけざわ たかし  
竹澤 卓

「青は藍より出でて、藍より青し」という日本の諺がある。「出藍の誉れ」ともいう。出典は『荀子一勸学』の一節であるが、まさに趙彦志君はこの諺を身をもって、見事に実証した。

趙君との出会いは1998年の煙台師範学院で日本語を指導した時である。当時彼の日本語は実にたどたどしいものであったが、彼の真剣な授業態度や表裏のない誠実味に溢れた人柄に、私は指導することの楽しさや、喜びを十分に感じる事ができた。

やがて彼は学院卒業後、日本の別府大学に編入。少しでも生活費や学費を得るためにと苛酷なアルバイトを続けた。毎朝五時頃起床しホテルに直行。そこで前日の後片付けや、朝食の配膳作業。終わると直ちに大学へ。夕方講義終了と同時にホテルでのアルバイト。自分のアパートへ戻るのは、いつも10時を過ぎていたとか。それからようやく研究活動。しかし研究書を読み始めると、一日の疲れのため猛烈な睡魔が襲ってくる。それで眠気防止のために、手の甲にボールペンを当てて本を読む。そのうちに何度かペン先が甲に突き刺さり、その激痛で目が覚める。こんな繰り返しの毎日は5年も続いたそうだ。蓄積された疲労困憊の連続でよく学究生活を続けたものだと、心からの驚嘆と賞賛の言葉をおくりたい。

その後彼は博士課程と進み、見事博士号を取得した。言語学分野において博士号取得は至難の技と言われている中での快挙である。本当に敬服に価する。

彼が現在研究を続けている「依頼文」は実に多岐にわたる研究分野

である。まだまだ究明されていない部分が多いだろう。それだけに魅力的な研究テーマと言えるかもしれない。尽きることのない彼の学究意欲は未解の分野に必ずや光を当ててくれるに違いない。

昨年6月10年振りで訪中した。その際彼から復旦大学の学生に講義をとという依頼を受けた。テーマについて迷ったが、数ヶ月前に起きた東日本大震災を取り上げ、日本人の精神構造の一端に迫ることにした。多少難解かと思った授業や私の質問にも、学生達は適格に解答し反応した。私は想像以上の満足感を覚えると同時に、趙君の日頃の指導のすばらしさを実感した。今後、趙君の更なる活躍を期待して、遙かな異国の地から、激励の熱いエールを私は送り続ける。

(元煙台師範学院日本語教師)

# 目 次

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 0. はじめに                   | 001 |
| 0.1 依頼文とは                 | 002 |
| 0.2 依頼文の主な文型              | 003 |
| 0.3 副詞成分による修飾             | 007 |
| 1. 依頼文内在の諸要素              | 014 |
| 1.1 「話し手」                 | 014 |
| 1.2 「依頼内容」                | 017 |
| 1.3 「聞き手」                 | 019 |
| 1.4 人間関係―「話し手」と「聞き手」のつながり | 024 |
| 2. 依頼文の系別考察               | 030 |
| 2.1 「～テクレル」系              | 030 |
| 2.1.1 「～てくれる」の構文と特徴       | 033 |
| 2.2 「～テモラウ」系              | 035 |
| 2.2.1 「～てもらえ!」命令文としての存在   | 035 |
| 2.2.2 「～ていただける?」文の特徴      | 036 |
| 3. 「～てもらいたい」文をめぐって        | 039 |
| 3.1 先行研究                  | 039 |
| 3.2 まちのぞみ文としての存在          | 040 |

- 3.3 「～てもらいたい」文の分類—— 045
  - 3.3.1 依頼的でない「～てもらいたい」—— 045
  - 3.3.2 依頼の意味をふくむとき—— 048
- 3.4 「～てもらいたい」文の聞き手—— 049
  - 3.4.1 聞き手が補語として名詞の格形によって明示される場合—— 051
  - 3.4.2 聞き手が主語として係助詞によって指し示される場合—— 054
- 3.5 「～てもらいたい」文と終助詞—— 059
- 3.6 「～てもらいたい+のだ・ものだ/と思います/こと・ものがある」—— 062
  - 3.6.1 「～てもらいたい+のだ・ものだ」—— 062
  - 3.6.2 「～てもらいたい+と思います」—— 066
  - 3.6.3 「～てもらいたいこと/ものがある」—— 068
- 3.7 「～てもらいたいです」「～ていただきたい」文—— 069
- 3.8 「～てもらいたい」文の周辺の文の待遇性—— 074
- 3.9 「～てもらいたい」文とほかの働きかけ形との共存—— 078
- 3.10 まとめ—— 081
- 4. 「～てほしい」文—— 084
  - 4.1 「～てほしい」文の意味・用法—— 084
  - 4.2 「～てほしい」否定文—— 086
- 5. 質問依頼文と命令文/勧誘文との関連—— 090
  - 5.1 質問依頼文と命令文—— 090
  - 5.2 質問依頼文と勧誘文—— 093

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 6. 日中依頼文対照                | 097 |
| 6.1 対照の背景                 | 097 |
| 6.2 中国語における命令文の特徴         | 097 |
| 6.3 日中両言語における依頼文の相違点      | 100 |
| 6.3.1 「～て」と「～てくれ」にあたる中国語訳 | 100 |
| 6.3.2 中国語の「请」による依頼文       | 102 |
| 6.3.3 中国語の依頼文に使われる補語の特徴   | 104 |
| 6.3.4 中国語の依頼文に使われる「補語」の特徴 | 106 |
| 6.3.4.1 「状語」と「補語」の位置の違い   | 106 |
| 6.3.4.2 「結果補語」の使い方        | 110 |
| 6.3.4.3 「方向補語」の使い方        | 110 |
| 6.4 中国語依頼文の動詞の諸特徴         | 111 |
| 6.4.1 単独の動詞のとき            | 112 |
| 6.4.2 動詞のくりかえし「V+V」       | 114 |
| 6.4.3 「V-V」の形式            | 117 |
| 6.5 中国語の依頼文の否定形           | 118 |
| 6.6 まとめ                   | 119 |
| 7. 間接依頼表現の特徴              | 121 |
| 7.1 間接依頼表現の特徴             | 121 |
| 7.2 間接表現はリスクがある           | 122 |
| 8. 結論                     | 124 |
| 8.1 使役意味の「～テモラウ」          | 125 |
| 8.2 受益意味の「～テクレル」          | 127 |
| 8.3 依頼文中の可能の意味            | 129 |

8.4 可能形が用いられない時の文の変化—— 134

8.5 まとめ—— 138

参考文献—— 139

用例出典—— 146

## 0. はじめに

「依頼」の研究方法に関しては、文レベルでの統語論的な「依頼文」の研究と形態論的な「依頼形<sup>①</sup>」の研究などがある。また、コンテキストレベルでの語用論的依頼表現の研究も見られる。本書は基本的に「依頼」を文レベルでの扱いとするので、形態論的な扱いに関する依頼形の論説は別の拙著『現代日本語依頼形の研究 ―形態論を中心に―』を参照されたい。

日本社会で「依頼」という言葉を聞くと、普通頭の中ですぐ思い浮かぶのは、おそらく「～オネガイシマス」であろう。大きく分ければ依頼文の中には基本的に二つの系列―「～テクレル」系と「～テモラウ」系が存在する。普段依頼がどういうふうに表示されているのか、使用頻度の高い「～てくれますか?」と「～てもらえますか?」二つの依頼文の丁寧度はなぜ違うのか、という二つの問題の解決は本書において目指したい。記述順序として先ず依頼の主な表現文型を紹介する。次に「～てくれますか」と「～てもらえますか」各自の文レベルでの特徴を明らかにしたうえで、両者の相違点を詳しく述べるとする。「～てもらいたい」「～ていただきたい」文は「～テモラウ」系に属するが、対応する「～テクレル」系の「\*～てくれたい」「\*～てくださりたい」文は存

---

① 高橋太郎、村木新次郎の用語である。ここの「命令形」は狭義の形「シロ」「シナサイ」を指し示す。次の文献を参考されたい。

高橋太郎 1974「標準語の動詞と京都弁の動詞」『言語生活』270号 筑摩書房  
(のち<1994『動詞の研究』むぎ書房>にも所収)

高橋太郎 1975『幼児語の形態論的な分析 ―動詞・形容詞・述語名詞―』国立国語研究所 秀英出版

村木新次郎 1991『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

在していない。前者は依頼として用いられる時にどんな文法的な特徴を持つのか本書の中で検討してみる。また、対照研究を視野に入れて日中依頼文の相違点をも考察してみたい。

本書は近・現代小説の中から(標準語の範囲で)依頼文に関する用例を引用、分析する方法をとっている(ただし作例も用いる)。事例に基づいて避けて通れない次の二つの問題をも意識しながら述べていく。まずは対人関係の配慮のもとに、この依頼文の中に存在する諸文型を明らかにする必要がある。また、依頼文に深い関連性をもつ他の表現文型への配慮のもとに、その意味と文構成の区別特徴を改めて定める必要があると考えている。

### 0.1 依頼文とは

「依頼」の概念について、益岡・田窪 1989<sup>①</sup>は「依頼は人に動作をするよう頼む場合のムードであり、相手の意志を尊重する点で命令より丁寧な表現である。依頼は『直接依頼形式』と自分の実情を述べて相手に間接的に動作の依頼をする『間接依頼形式』とがある。その『直接依頼形式』には『動詞のテ形＋くれるの命令形』が挙げられる」と述べている。仁田義雄 1991<sup>②</sup>が定義しているように、「話し手のためになる行為を聞き手に促すものである」。また、国語研 1994<sup>③</sup>において、「能動的談話」、つまり他者に働きかけて行為をさせる行為要求の談話は、次の五種に分類されている(下線は著者)。

指示…然るべき立場にある人が当然の資格・権限をもって行為を要求する  
談話

注文…業務など、その行為を当然行うべき立場にある相手に行為を要求す

---

① 益岡隆志・田窪行則 1989 『基礎日本語文法』 くろしお出版

② 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房

③ 国立国語研究所 1994『日本語コミュニケーションの言語問題』国立国語研究所

る談話

依頼…相手の好意に期待して行為を行うよう求める談話

勧め…相手自身の利益になる行為を行うよう求める談話

勧誘…自分が行おうとしている行為をいっしょに行うよう求める談話

要約すれば、行為要求の談話は「行為をするのがダレか」、「それによって利益を受けるのはダレか」、「聞き手に対して強制力があるのか」などの軸によって分類される。山田敏弘 2004<sup>①</sup>によって、依頼は「話し手自身が利益を受けるために、相手に行為を求める行為である。依頼は聞き手に対してある行為を遂行するよう話し手が促すことと、その聞き手のなす行為によって話し手が恩恵をうけることから成り立っている」と解釈している。蒲谷宏・川口義一・坂本恵 1998『敬語表現』の定義によれば、依頼表現は、『相手』の『行動』によって、『自分』の『利益』になることを叶えようとするための表現」ということである。

以上簡単に列挙したように、今日まで研究者たちがさまざまな角度から依頼表現の意味、機能をめぐって論じてきている。しかし、「依頼文」というのはいったい何であろうか？ 言語的、非言語的行動の問題と並んで、見落とせないのは、依頼は単に「～オネガイシマス」といったことばを口にすることではなく、談話の中に実現される構造を持った総合的な行為だという事実である。依頼文全体を一つのカテゴリーとしてとらえるならば、本書においてその概念を「話し手が依頼内容を聞き手に伝えて、最終的に聞き手に行動させて、話し手の利益になることを目的とする表現文型である」と定めておく。

## 0.2 依頼文の主な文型

依頼意図が表明された後、聞き手にとって、話し手のために確実に

---

① 山田敏弘 2004(引用自 P142)

行動に移るか否かの決定権利は自分側にある。普通劣勢にいる話し手にとって、その行動を実現させるために、特に聞き手が上位者である場合には敬語表現との関わりにおいて、ほかの表現に比べ依頼文はもっとも工夫が必要になるということが出来る。依頼も、親しい聞き手ならその表現形式は簡素なものになるし、権限をもって指示する場合でも、丁重に扱うべき聞き手に対しては待遇レベルの高い形式を用いなければならない。また一般に行為要求の種別は、聞き手との上下・親疎等の関係だけでなく、要求する行為の内容によって、つまり、だれのためか、要求に強制力があるかなどの要素をも考慮して、判断されなければならない。

依頼の内容は千差万別であるが、物事を頼むのは、話し手にとって聞き手に多少とも迷惑をかけることになるのだということを承知しておかなければならない。聞き手に対して、できるだけ迷惑の程度を軽減する配慮も重要である。その迷惑だという気持ちよりも、依頼に応じようという気持ちの方が強くなるようにするには、何よりも誠意を持って、聞き手に接することが大切であろう。自分の事情を十分に理解してもらうための努力も必要である。次に挙げている諸例は今回主に述べようとする二つの系列の下位分類である。

### 「～テクレル」系

- 1) 哲郎が机に向かい、地球儀を手に戻ってくる。ソファのテーブルに置くと、指先でくるりとはいじた。「ここを出るとき、これを受け取ってくださいか。年代物になってしまいましたが、私が子供の頃から大切にしていた一番の宝物です。これがあるから今まで生きてこれた、自分ではそう思っています。この剥げかかったところ、紙を小さく千切っては自分で修理したんですよ。養護施設にいたときにね。一年は優にかかりました」

白川道 『海は涸いていた』

- 2) 「その前に、お兄さんの部屋を、もう一度徹底的に調べてくれませんか」と、浦上は最初の方針を打ち出してきた。だが、いきなりそう言われても、なにをどう調べればいいのか。玲子が困惑したように目を伏せると、「できれば、ぼくが立ち会いたいですね」と、浦上はつづけた。

津村秀介 『宍道湖殺人事件』

- 3) 書記はやがて慣れた指先で、その義肢をはずし始めた。僕はそれを見つめていた。「おい」と書記が子供らに叫んだ。「俺の所へ轎を運んでくれ」

大江健三郎 『飼育』

- 4) 夫婦はまたいったん顔を見合わせると、ほとんど同時に怪訝な顔つきで僕を振り仰いだ。「お願いします。このまま何も聞かずに後ろの車両に移ってください」「きみは、誰」と妻の父親が尋ねた。

佐藤正午 『Y』

- 5) 「…そして、申し訳ありません、見苦しいですがお許しください。私たちのミスで、大学の実行委員たちはお金をくれなかったんです。…と、黒山の観客のまえでいいです。」

森村桂 『おいで、初恋』

- 6) 「これは誰にもいわないのでしょうね」「もちろん、そんなこといったら私達が困ります。では早速、明日にでも診断書をつくってくださいますか」「僕は、基準局の人に、直接会う必要はないのですね」

渡辺淳一 『風の岬』(下)

- 7) 「どうしましょう。近くのホテルをご指定くださいますか。それともさしつかえなければお宅へ伺いましょうか」相手の言葉はますます具体的になってきた。桑名は一拍考えてから、「ここへいらしってくださいたら有難いですね」と答えた。

森村誠一 『都市の遺言』

### 「～テモラウ」系

- 8) 「総監も私も、西地さんと京塚弁護士のご両人から、話の概略はすでに聞いています」そう口にしてから、一課長の志村に小橋警視監が目を向けた。「一課長、ごくろうさまでした。あとは私がやりますので席を外して

もらえますか」

白川道 『海は潤いていた』

- 9) 「わかりました。賞に関してはなんなりと資料を送って差し上げますから、来生恭子のことでなく、高岡真紀の所在の確認を心がけてもらえませんか」瞬間、木部美智子の言ったことばを思い出した。

望月諒子 『神の手』

- 10) 万穂子は甲村の背中を意識しながら、志摩の快活さに調子を合わせる。「志摩さんらしいわ。…。だから志摩さんの秘書になってきたえてもらうと同時に、あなたにも何かと助けてもらいたいわ」甲村の背中がかすかに動いた。

藤堂志津子 『ジョーカー』

- 11) ①「僕と一緒に寝坊をすりゃ幸福になる」まともにはうけとろうとしな  
い相手に私は腹を立てた。「もうすこし用心深く付き合ってほしいわ」

原田康子 『病める丘』

- 12) 「さあ。それはなんとも申しあげられませんが、東岳のことといい、フルールのママのことといい、津金さんがなんらかの悪意を持っておられた  
としか思えません。警察のお力で一刻もはやく、事件を解明してくださ  
ることをお願いいたします。わたしどもといたしましては、できる限り  
のご協力をいたしますので、どうか、一刻もはやく事実を解明していただ  
きたい。それをお願いするばかりでございます」重森は困惑顔でいつ  
た。「承知しました」宮之原はうなずいて、応接室をでた。

木谷恭介 『京都呪い寺殺人事件』

- 13) 深町はかえって複雑な緊張に捉えられながら、弁護人席で起立した。被  
告人質問も、弁護側から口を切る通例である。「あなたは、二月二十一  
日から二十二日にかけての夜、優ちゃんが死亡した当時の模様を憶えて  
いますか」「はい」と由花は例の澄んだ声で、これも意外なほど素直な様  
子で頷いた。唇の両端を引きしめ、やや斜視がかった、さすがに緊張の

---

① 「～てほしい」文は系列的に「～テモラウ」系と違うが、「～てもらいたい」文と意味・機能においてきわめて近いので、一応ここで一緒に並べておく。

表情ではある。「今、それをありのまま話していただけますか」「はい…」

夏樹静子 『霧氷』

- 14) 船津は、再び話題を戻した。だが、父親の表情は相変わらず不安そうなままだった。「ただ、日中は私にも仕事がありますんで、そうすると…」  
「まあ、すぐに結論を出さなければならないわけでもないですから、少し、考えてみていただけませんか」彼は、わずかに硬い表情で「分かりました」と頷いた。

乃南アサ 『凍える牙』

### 0.3 副詞成分による修飾

依頼に見られる話し手の受益を保証する副詞的なものとしては、受益者の存在を顕著にする「～のために」や依頼を表明する前に話し手＝依頼者の「お願いだから」「お願いします」「頼みます」「どうか」「どうぞ」を付け加えている。例えば、

- 15) 博士が、ものをいったので、戸山少年はわれにかえって、博士のそばに寄りそった。「この機械人間はおじさんがこしらえたのですか。おじさんはえらい技術者なんですね」「おお、君。わしのため力を貸してくれんか」博士は、戸山のほめことばに答えず、急に気がついたように少年にそういって、…。

海野十三 『超人間 X 号』

- 16) 「どうか、ごめんください。そして、わたくしのため、このことは、誰にもいわない、よろしいですか。きっと、きっと、誰にもいわない。わたくしと、ここで衝突したこといわない。あなたいいません!いわないこと、約束してくれますか。それを守ってくれるなら、あとでまた、お礼のお金をさしあげます」ニーナ嬢は、ねっしんに、そして早口で、曾呂利をかきくどいた。

海野十三 『爆薬の花籠』

- 17) 広報室の男は、もうどうしようもない、というふうに首を左右に振った。